

都心部での子連れ家族の回遊行動と 子どもの様子との関係に関する研究 ～福岡市天神地区を対象として～

辰巳 浩¹・吉城 秀治²・堤 香代子³・西原 大樹⁴・古閑 勇貴⁵

¹正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail:tatsumi@fukuoka-u.ac.jp

²正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail:syoshiki@fukuoka-u.ac.jp

³正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail:kayoko@fukuoka-u.ac.jp

⁴学生会員 福岡大学大学院 工学研究科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail:td154011@cis.fukuoka-u.ac.jp

⁵非会員 下関市役所 (〒750-8521 山口県下関市南部町1-1)

誰もが楽しく快適に回遊できる中心市街地の創出は、都心の活性化に向けて重要な検討事項である。とりわけ少子化対策が喫緊の課題となっている我が国においては、子連れであっても回遊しやすい中心市街地を整備していく必要があるものと考えられる。そこで本研究では、福岡市天神地区を来街した人を対象としたアンケート調査をもとに、子連れ来街者の回遊行動について子どもの為に訪れた場所であるか否かといった視点から把握し、回遊行動と子どもの様子との関係について明らかにした。

その結果、乳幼児連れと小学生連れで子どもの為の回遊か否かによる回遊行動に違いがみられ、さらにはそれらの回遊行動に対する子どもの様子も異なることが明らかとなった。また、子連れ来街者の回遊目的を反映した結果として訪問場所によっても子どもの様子に違いがみられた。

Key Words : child rearing, city center, reaction to excursion behavior

1. はじめに

誰もが楽しく快適に回遊できる中心市街地の創出は、都心の活性化に向けて重要な検討事項である。とりわけ少子化対策が喫緊の課題となっている我が国においては、子連れであっても都心に訪れやすい交通環境を整備していくとともに、都心に訪れてからも回遊しやすい中心市街地を整備していく必要があるものと考えられる。

そこで、学術的にも子連れ家族や子どもを対象とした研究が行われつつあり¹⁾²⁾、中でも近年では幼少期における都心での楽しい思い出が将来的に都心を指向させる上で重要であるとの研究成果も得られている⁴⁾。すなわち、都心の活性化に向けては子連れ家族や子ども自身が「楽しく」回遊できる環境を整備していくことが重要であると考えられる。

しかしその一方で、回遊環境を検討していくための子連れ家族の回遊行動に着目した研究はまだ不足して

おり、これまでに一般来街者との比較を通じてその回遊特性を明らかにした研究⁵⁾が行われている程度である。都心において、子連れ来街者は子どもの為にどのような回遊を行っているのか、そして子どもが楽しく回遊できているのはどのような場所を訪れているときかなど、子どもを楽しく回遊させるための知見については十分には明らかにされていない。

そこで本研究では、都心において乳幼児や小学生を連れた子連れ来街者の回遊行動を子どもの為に訪れた場所であるか否かといった視点から把握し、回遊行動と子どもの様子との関係を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要と子連れ来街者の定義について

(1) 調査対象地域について

本研究で対象とした天神地区(福岡市中央区)は、商

業・業務としての機能が集積しており、若者から年配の方まで幅広い年齢層の人々が集まる九州随一の商業地区として発展している。なお、本研究での回遊行動の調査対象範囲は、住所が福岡市中央区天神であるエリアを中心に近年若者向けの店舗の出店が相次ぐ天神西通りの周辺を含んだ範囲とし、かつキャナルシティ博多や博多リバレインといった天神地区に隣接した大型商業施設を含めたエリアとしている。対象地区の概略図を図-1に示す。

(2) アンケート調査について

本研究では、2015年10月3日(土)、4日(日)、10日(土)にアンケート調査を実施した。調査概要を表-1に示す。子連れ来街者と一般来街者(子連れ来街者以外)に対して計3,800部を直接配布し、郵送にて回収した。その結果、計1,129部回収できている(回収率29.7%)。また、それぞれの配布場所での回収率は表に記載のとおりであり、配布場所による回収率の偏りはほぼみられなかった。そして、アンケート回答者には、主に個人属性、調査票を受け取った日の回遊行動(訪問場所、目的(買

表-1 調査概要

調査概要	配布日	平成27年10月3日(土)、4(日)、10(土)
	配布・回収方法	無作為配布・郵送回収
	配布場所	福岡市天神(ライオン広場(福岡三越玄関口)、大丸エルガーラ前・パサージュ広場、天神地下街、天神イムズ地下)
調査内容	配布部数	各地点1,000部(ライオン広場のみ800部)合計3,800部
	回収部数、回収率	1,129部、29.7% [ライオン広場 23.4%, 大丸 31.5%, 天神地下街 30.2%, イムズ地下 32.5%]
調査内容	個人属性	性別、年齢、職業、居住地、子どもの有無等
	(調査票を受け取った日)天神地区での回遊行動	同行者の属性と人数、回遊行動とその目的、消費金額、滞在時間、(子ども連れの回答者のみ)子どもの為の回遊か否か、回遊時の子どもの様子等

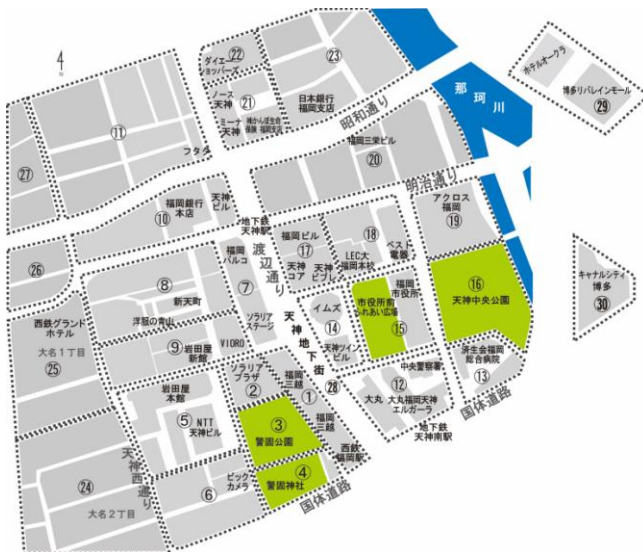


図-1 天神地区の概略図

い物、食事、娯楽、休憩、観光、業務、その他)、滞在時間、(子ども連れの回答者のみ)子どもの為を訪れた場所であるか否か、回遊時の子どもの様子等}について尋ねている。

アンケート回答者の性別、年齢、職業、居住地を図-2から図-5に示す。女性の回答割合が8割程度と高く、以下に示される結果についてはそのことに留意する必要がある。一方で、年齢について各年齢層から偏りなくサンプリングできており、職業についても同様である。また、回答者の多くが福岡市内の居住者であり、福岡市を除く福岡県内居住者が約2割、福岡県外からの来街者もわずかにみられる。

(3) 子連れ来街者の定義

本研究では、子連れ来街者の回遊行動ならびに子どもの回遊時の様子について明らかにすることを目的としているため、アンケート調査票を受け取った日に実際に小学生以下の子どもを連れてくる来街者を子連れ来街者と定義する。まず、天神地区来街時の同行者について図-6に示す。図より、最も回答が多かったのは同行者なしで一人で来街した回答者であり、次いで小学生以下子連れ家族、配偶者・パートナーの順となっており、この「小学生以下子連れ家族」を子連れ来街者とする。さらに、子連れ来街者の回遊については連れてくる子どもの年齢によって回遊の目的や性質が異なることが考えられることから、子連れ来街者に該当する回答者に小学生未満の子どものみがいる場合を「乳幼児連れ来街者」、小学生の子どものみがいる場合を「小学生連れ来街者」とし、以下この分類を基に集計を行う。

図-7に乳幼児連れ来街者と小学生連れ来街者の年齢層

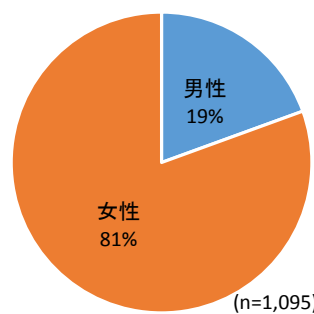


図-2 性別

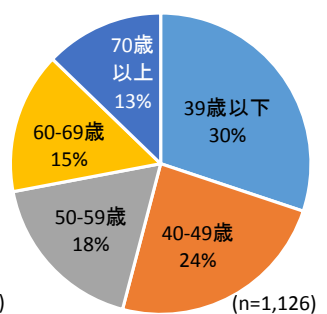


図-3 年齢

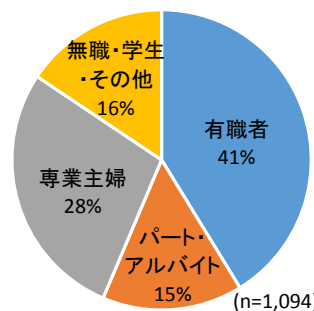


図-4 職業

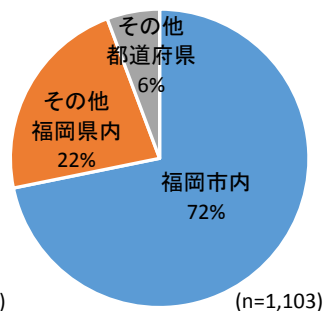


図-5 居住地

について集計し、残差分析を行った結果を示す。それぞれのグループの特徴として、乳幼児連れでは8割近くを39歳以下が占めており、小学生連れではその割合は3割程度と低くなっていた。一方で、小学生連れ来街者については、40～49歳、50～59歳の年齢層において乳幼児連れよりも高い割合を示している。

3. 乳幼児連れ来街者と小学生連れ来街者における子どもの為の回遊実態

本章では、子連れ来街者による子どもの為のどのような回遊を行っているのか、その実態を明らかにする。表-1の調査概要でも示したように本調査では訪れた場所およびその順番、および各場所の訪問目的等を問うているが、さらに訪れた場所が子どもの用事を主目的とした子どもの為の回遊であったか、それ以外の目的であったのかを尋ねている。以下では、乳幼児連れ来街者、小学生連れ来街者別に「子どもの為の回遊」と「それ以外の回遊」の比較を通じて子どもの為の回遊の実態を明らかにする。なお、多くの回答者が5箇所目までの回遊までに帰宅等によって天神地区から移動しているため、本章では5箇所目までの回遊を対象に以降の分析を進めていく。

(1) 全体の回遊に占める子どもの為の回遊回数

まず、子連れ来街者が回遊全体の中でどの程度子ども

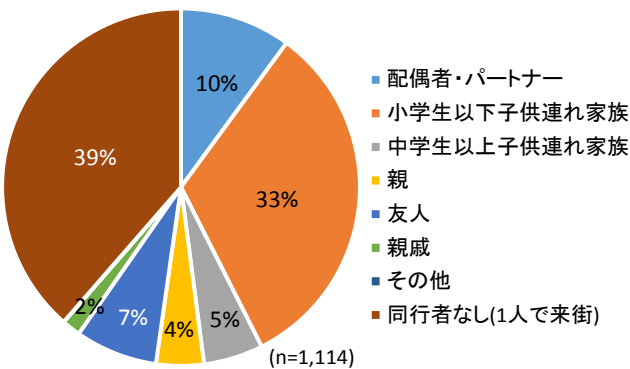


図-6 天神地区来街時の同行者

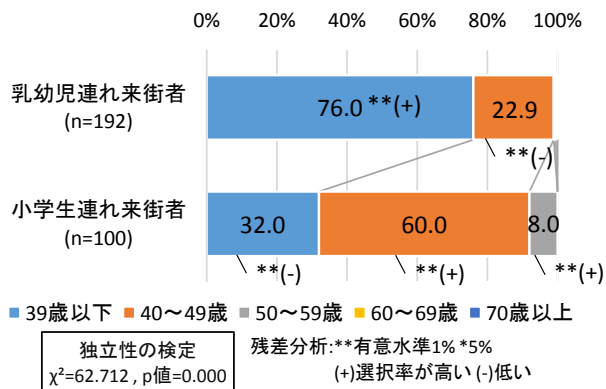


図-7 子連れ来街者の年齢層

の為の回遊を行っているかについて把握する。天神地区内で行った総回遊数別にサンプルを分類し、子どもの為の回遊が占める数を算出した。その結果を図-8に示す。図より、乳幼児連れの総回遊数が1回の来街者のおよそ半数は子どもの用事を目的として訪れており、小学生連れでは4割弱となっている。また、全体的な傾向として総回遊数が増加するにつれ子どもの為の回遊回数も増加する傾向にあるが、総回遊数に関わらず概ね2～3回程度は子どもの用事を主目的とした回遊を行っている傾向にある。

(2) 子どもの為の回遊と回遊目的の関係

続いて各場所を訪れた目的との関係を明らかにする。図-9に回遊目的別に子どもの為の回遊であったのか否かを集計し、残差分析を行った結果を示す。乳幼児連れと小学生連れの両者ともに娯楽や休憩目的の場合は子どもの為の回遊である割合が高くなっている。一方、小学生連れにおいては買い物目的の場合に子どもの為の回遊割合が乳幼児連れと比べて高くなっており、このことから、

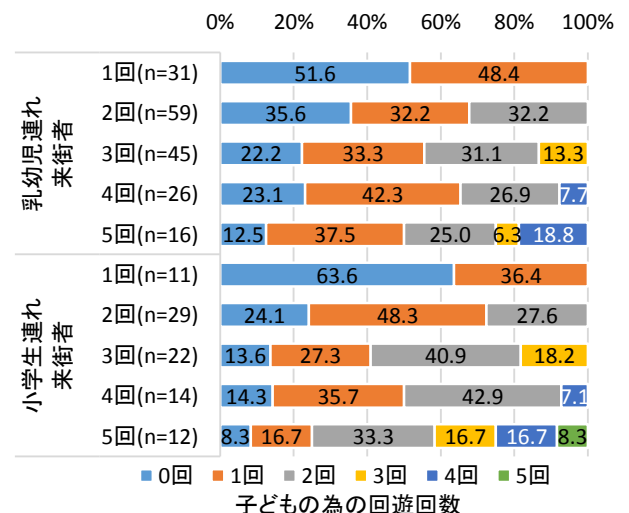


図-8 総回遊数別の子どもの為の回遊割合

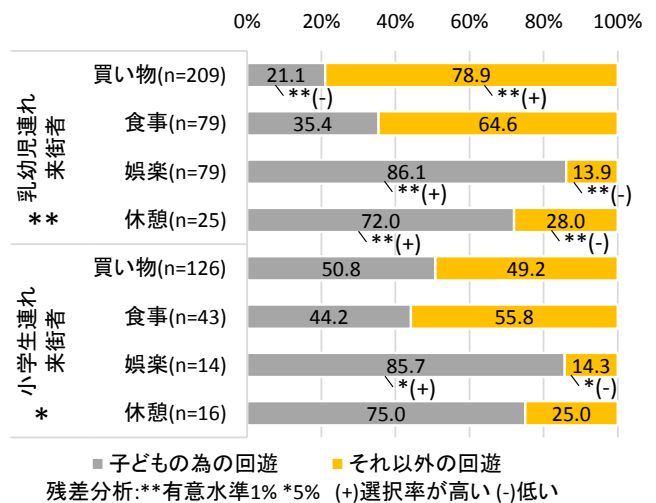


図-9 各回遊目的における子どもの為の回遊割合

子連れ来街者の中でも乳幼児連れは「娯楽」と「休憩」を子どもの為の回遊として行っており、小学生連れにおいては「買い物」についても子どもの為の回遊として行われている傾向にあるといえる。

さらに、この子どもの為の回遊について詳細に把握する。本研究では各回遊場所に対して子どもの為にどのような理由で訪問したのかを自由記述形式にて尋ねており、それらの回答をもとに整理した結果を図-10に示す。図より、乳幼児連れでは「娯楽目的」の回答割合が5割程度、小学生連れでは「買い物目的」の回答割合が6割程度と他の訪問目的に比べ高い割合を示している。また、それらの訪問目的の詳細をみると、乳幼児連れの娯楽目的については、主に「イベントやコンサート」「子どもを遊ばせるため」、小学生連れの買い物目的については、「洋服を買うため」「雑貨や本、文房具、キャラクターグッズを買うため」といった訪問理由が高い選択率を示していた。これらは、乳幼児連れか小学生連れかによって子どもの為の回遊内容が大きく異なることを示しており、さらには子どもを楽しませるための回遊行動が大きく異なることを示した結果と考えられる。

4. 子連れ来街者の子どもの為の回遊と回遊時の子どもの様子について

前章での回遊行動の理解を通じて、子連れの回遊行動には保護者が子どもに配慮した行動、すなわち子どもを楽しませることを目的とした回遊がみられた。そこで本章では、子連れ来街者の回遊行動と回遊時の子どもの様子との関係について分析することにより、子どもが楽しく回遊できる環境のあり方について検討を進める。ここで、本章における子どもの様子については、アンケート

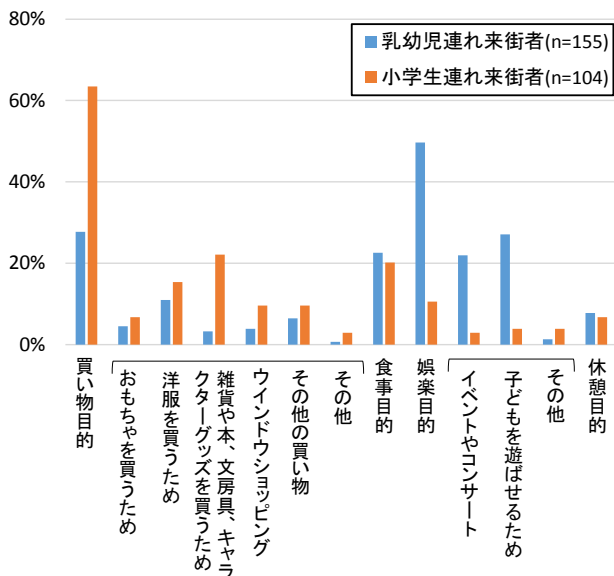


図-10 各回遊場所への訪問理由

にて各回遊行動を受けての子ども様子を「とても喜んだ」「喜んだ」「ふつうだった」「嫌がった」「とても嫌がった」の5段階にて回答者に評価してもらっており、本研究においては、「とても喜んだ」「喜んだ」を「喜んだ」評価として集約し、「嫌がった」「とても嫌がった」については回答が少数であったため「ふつうだった」と統合して「ふつうだった・嫌がった」評価として以降の分析に用いることとする。

(1) 子どもの為の回遊場所と子どもの様子の関係

まず、子どもの為の回遊場所であったのかと子どもの様子の関係について集計し、残差分析を行った結果を図-11に示す。乳幼児連れ、小学生連れ来街者共に子どもの為に回遊した場所では「喜んだ」と回答した割合が7割程度、それ以外の回遊では3割程度となっており、子どもの用事を主目的とした回遊場所のほうが子どもがより喜んでいただことがみてとれる。乳幼児連れ、小学生連れでその傾向は変わらず、都心で子どもの為に行われる回遊は子どもの年齢を問わず子どもを楽しませることが可能であるといえる。

(2) 子どもの様子と各回遊目的との関係

次いで本節では、子どもの様子と回遊目的との関係を明らかにする。図-12に子どもの様子、子どもの為の回遊であったかどうか、その回遊目的の関係について集計し、残差分析を行った結果を示す。乳幼児連れ来街者について、喜んだ様子であった際の回遊目的は「子どもの為の食事」や「子どもの為の娯楽」の割合が高くなっており、ふつうだった・嫌がった様子であった際には、「それ以外の買い物」の割合が高くなっていることが特徴として挙げられる。一方で、小学生連れ来街者について喜んだ様子であったのは、「子どもの為の買い物」の割合が高いことが特徴として挙げられる。そして、ふつうだった・嫌がった様子の際には、乳幼児連れと同じく「それ以外の買い物」目的である場合には回遊割合が高くなっている。このことから、乳幼児は特に子どもの為

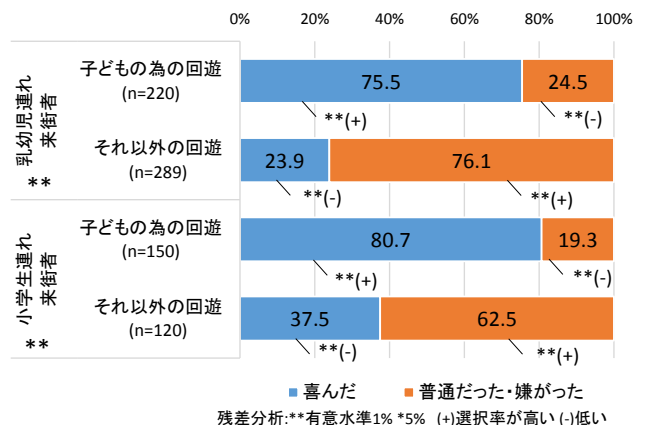


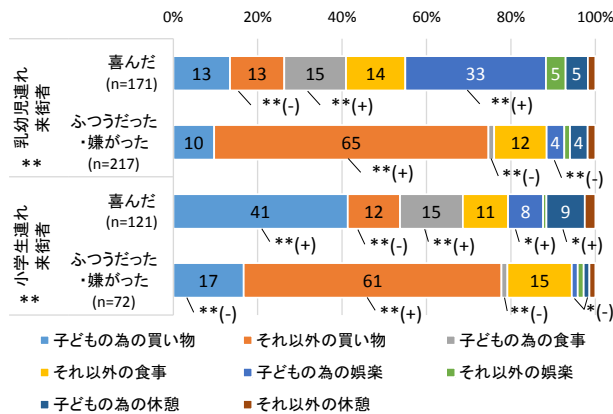
図-11 子どもの為の回遊場所と子どもの様子との関係

の娯楽で喜んでいる傾向にあり、小学生は特に子どもの為の買い物で喜んでいる傾向にあった。また、「それ以外の買い物」といった親や他の同行者の買い物に付き合わされる回遊については共に喜ばれない傾向にあるといえる。

(3) 各訪問場所における子どもの様子について

最後に、都心において子どもがどのような場所で楽しんでいるのかを明らかにする。本研究では施設の立地状況や住所を考慮して天神地区を30エリアに分割し(図-1参照), それらに対して乳幼児連れ来街者と小学生連れ来街者の回答者で回遊時の子どもの様子について回答しているサンプルを抽出した。そして、そのサンプル中に占める子どもが「喜んだ」との回答割合を算出し、図-13に乳幼児連れ、図-14に小学生連れの各エリアでの子どもの喜んだとの回答割合を示す。なお、各エリアでの子どもの様子についての回答が10サンプルを下回るものについては欠損エリアとし、エリア番号29・30にあたるキャナルシティ博多と博多リバレインを含むエリアがそれに該当したため図からは除いている。

まず、乳幼児連れにおいては、特にエリア番号3や15, 19で喜んだとの回答割合が高くなっていることがわかる。エリア番号3や15には公園や広場があり、エリア番号19ではコンサートやイベント等が行われるエリアとなっており、その結果、これらエリアを訪れた乳幼児は楽しい時間を過ごせたものと考えられる。一方で小学生連れについては、若者向けの衣類や雑貨等を取り扱う商業施設が立ち並ぶエリア番号7や14, 17, 24, 28, あるいは大型の書店があるエリア18で喜んだとの割合が高い傾向にある。前節でも示されていたように、小学生連れ来街者は子どもの為に買い物に訪れる割合が高くなっていたこともあり、衣類やグッズ、書籍等を買ってもらえることで都心において楽しい時間を過ごしているものと考えられる。さらに乳幼児連れと小学生連れで対照的な結果がみられたエリアとして、乳幼児連れが多く訪れており、



残差分析:**有意水準1% *5% (+)選択率が高い (-)低い
図-12 子どもの様子と各回遊目的との関係

さらに乳幼児が喜んでいた割合が高くなっていたエリア番号3や15においては、小学生連れではそもそも訪れている割合が少なく、欠損エリア扱いとなっていることがわかる。前節の結果も踏まえこれら結果は、乳幼児連れおよび小学生連れでは都心において子どもの為に訪れる場所、子どもが楽しく時間を過ごしている場所は大きく異なっており、子どもを楽しませるためのニーズも異なってくるといえよう。

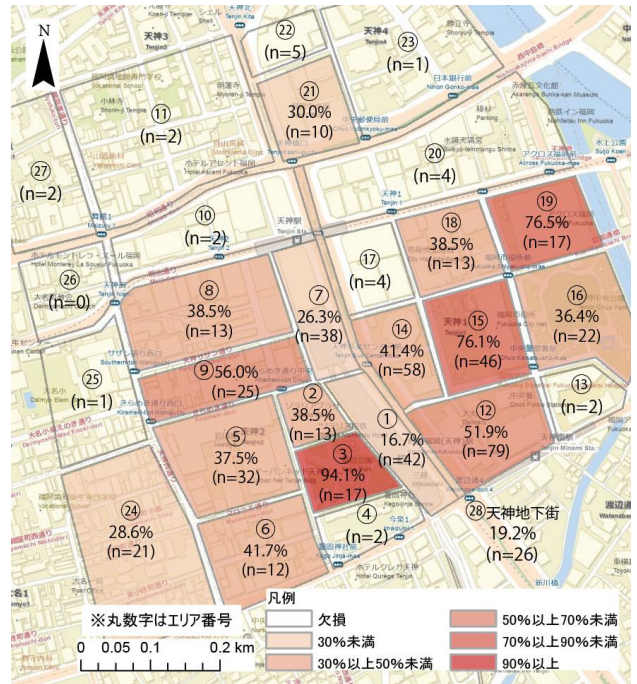


図-13 乳幼児連れ来街者の各エリアにおける「喜んだ」様子の選択率

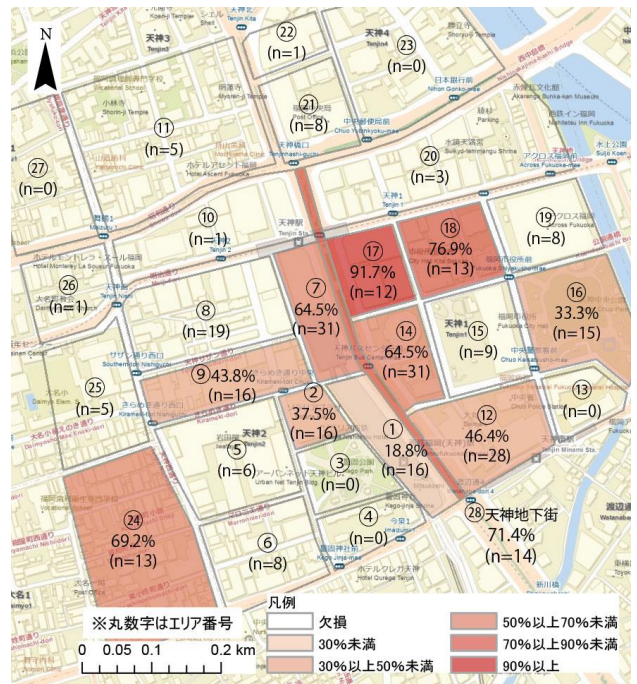


図-14 小学生連れ来街者の各エリアにおける「喜んだ」様子の選択率

5. おわりに

本研究では、子連れおよび子どもが楽しく回遊できる都心環境を検討するために、天神地区での一日の回遊行動と子どもの様子の実態について明らかにしてきた。

以下に得られた知見について示す。

- ・ 総回遊回数が増加するにつれ子どもの為の回遊回数も増加する傾向にあるが、総回遊数に関わらず概ね 2~3 回程度を子どもの用事を主目的とした回遊を行っている傾向にあった。
- ・ 子どもの為の回遊について、乳幼児連れは娯楽と休憩目的においてその割合が高く、小学生連れは加えて買い物目的においてもその割合が高くなっていた。
- ・ 子どもの為の回遊場所における訪問理由として、乳幼児連れでは娯楽目的、小学生連れでは買い物目的の選択率が比較的高い選択率を示していた。さらに、娯楽目的としてはイベントやコンサート、遊ばせるためといった理由が多く、買い物目的としては子どもの洋服や雑貨、本などを買うためといった訪問理由が多く挙げられていた。
- ・ 乳幼児連れ、小学生連れ来街者共に子どもの為の回遊である場合には子どもが喜んでいる傾向にあった。特に乳幼児連れ来街者においては娯楽目的、小学生連れ来街者においては買い物目的の割合が高くなっている。一方で、ふつうだった・嫌がった場合においては両者ともに保護者の買い物に付き合われる等の場合にその割合が高くなっている。
- ・ 各エリアに対する子どもの様子についても違いがみられた。乳幼児連れ来街者の子どもでは「娯楽」や「休憩」目的として公園や広場、イベント等が行われるエリアに対して喜ぶ傾向にある一方で、小学生

連れにおいては、「買い物」目的による商業施設への回遊などに対して喜ぶ傾向にあることが示された。

なお、今回の分析では各訪問場所と子どもの様子との関係を分析してきたが、今後は、天神地区に訪れてから帰宅するまでの一連の動きを把握していくとともに、子どもの様子との関係を分析したいと考えている。さらには子どもの様子に対して影響し得る回遊の要因について明らかにしていきたいと考えている。

謝辞：本研究におけるアンケート調査の実施に際しては、We Love 天神協議会の協力を得ている。ここに記し謝意を表明する。

参考文献

- 1) 大森宣暁, 谷口綾子, 真鍋陸太郎, 寺内義典, 青野貞康: 子育て中の女性の外出行動とバリアに対する意識に関する研究 - 首都圏在住の乳幼児を持つ母親を対象として -, 都市計画論文集, Vol.46, No3, pp.259-264, 2011
- 2) 谷口綾子, 奥山有紀: 子育てバリアフリーにおける世代間ギャップと副作用の可能性に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.68, No.5(土木計画学研究・論文集第 29 巻), pp.I_1133-I_1142, 2012.
- 3) 西本由紀子, 上野勝代, 梶木典子: 公共交通機関におけるベビーカー利用者の行動特性に関する研究, 日本建築学会技術報告集, 第 16 巻, 第 33 号, pp.727-730, 2010.6
- 4) 吉城秀治, 辰巳浩, 堤香代子: 幼少期における思い出と現在の都心志向の関係性に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.71, No.5(土木計画学研究・論文集第 32 巻), pp.I_81-I_90, 2015.
- 5) 辰巳浩, 吉城秀治, 堤香代子: 都心での子連れ来街者の回遊特性に関する研究~福岡市天神地区を対象として~, 土木計画学研究・講演集, Vol.52, 2015